

# 村松秀太郎作品集

## 絹谷幸二

村松秀太郎先生は平成12年4月に大阪芸術大学美術学科教授となられ、平成14年4月より同学科学科長として永年勤め上げられました。その退任展にあわせ、自選による画集を遡上されました。

厚紙表紙(24.5cm×26cm) ページ数(77ページ)に氏の画業の中心となる代表作61点がおさめられ、巻頭に佐野敬彦氏(美術評論家)と清水秀作氏(美術記者)が松村芸術について、それぞれのお立場から語っています。

まず、佐野敬彦氏は「日本画というと、花鳥風月に象徴されるような、やわらかで、あっさりして、しっとりした情調に富んだ親しみのある風合いを想像させるかもしれないが、村松日本画はまったく違う。優美なところはなく、画面はどろどろ、がさがさ

し、気味悪い形がうごめき、むしろ見る者に険悪の情を起こさせたり、戦慄させたり、そしてこうふんさせたりする。それは日本画でなくて、どちらかという、油画的画面をおもわせる。つまり、それは村松絵画としかいいようがないものである。

なぜだろうか。村松の作品は日本画の系譜では珍しくも生命の賛歌と反人間的なものへの抗議と怒りを表現する絵画である。」

それに続いて清水秀作氏は「村松作品は、人間を多目的に、しかもなり上げるように熱気と悔恨の情が交差する中で捉えようとするところに特色がある。人間の肯定は、その表裏にある悔恨への眼差しによって成される。人間を個の存在としてのみとらえられることはない。集団となった時におきる摩擦、悲しいまでの愚かさも持つ存在と意識している。骨髄を描き、戦車に蹂躪されることがたを描くのもそのためだろう。情緒や詠嘆に流さずに日本画の世界を拡充するには力技である。表面的な美しさだけでは世界の成り立ちを得心しないという現代感覚を保ってい



記念撮影'99 Commemorative photograph '99  
193.9×130.3cm 1999/平成11年



勝つ馬 Victorious horse  
194.0×324.0cm 2001/平成13年



頸I ShackleI  
181.0×227.0cm 2002 / 平成14年



千手観音 One thousand handed Kannon [Goddess of Mercy]  
182.0×227.0cm 2004 / 平成16年

るといふことだ。自選展以後の創画出展作品に見逃せない迫力があるのは、画家のそういう人間存在への認識の深まりがあるからだ。独自の思考と文化への誇りを表した《記念撮影99》、うまがたにひとがたが蹴散らされている様をとらえた《勝馬》、ひとがたが空に投げ出されて開展し続ける様が慟哭の挽歌ともいえる様な《頸<sup>くび</sup>》。ひとがたはしばしば画面にばら撒かれて登場した。画面というよりも、一つの宇宙空間を彷徨するかのようにもつれ合いながら、そして、そして最新作群は今日の仏画の形を借りながら開展される。救いなど他者に求めるなど現代を笑い飛ばすかのような《千手観音》、自らが怒る獅子となり菩薩を乗せて命のダイナミズムを謳いあげる《文殊菩薩》。

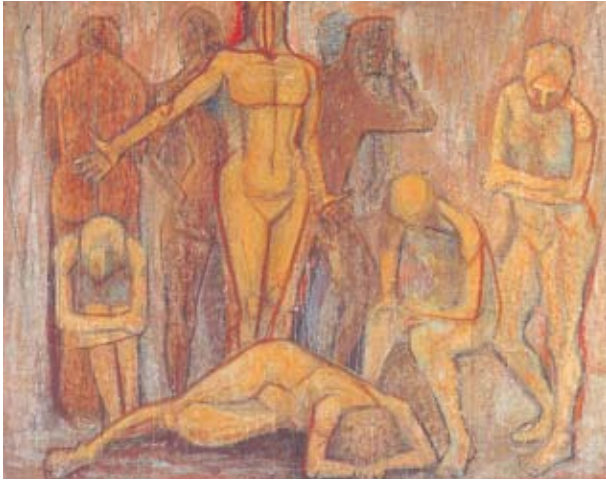
両氏共、村松秀太郎の画業の真髓を言い得て見ようと言えましよう。

所で、私と村松氏は毎年決って中秋の名月の日、千葉県市川市真間の寺で必ずお会いするというチャンスをお互いに持っています。小高き丘の上に夕刻、想像も絶する大きな満月が樹間からぬくくと顔を出す。その時を待ってたかの様に謡曲や鼓の音が響き出す。美酒を画家二人がぐみ交わし、一言二言おたがいの健康のこと、芸術の話などをして月が頭上に来た頃、寺をあとにし、二人はわかれます。年一回のほんの

短い時間ではありますが、画家として月の下で、心胆を照らし合わせ、又の再会と絵がそれぞれの持つ時間系列の中での増々進化することを口には出さず、目と目を合わせる一瞬の刹那に確認して、お元気で……と。アトリエに踵をかえすことになります。



文殊菩薩 Monju [Wisdom] Bodhisattva [Bodhist saint]  
227.0×182.0cm 2005 / 平成17年



六月 June  
230.0×297.0cm 1961/昭和36年

思えば東京芸術大学の学生時代から氏はその名を科を越えて集人の信る異質の人でした。

正に評論家の先生が言われるごとく、在学当時から、村松秀太郎氏は日本画を描く人とは思えない度量を持った人だといえます。

初期の「六月June」や「寄るA」「寄るB」などは油画科の作風を思わせる自由活達な心の振幅があり、当時から折り目正しい普通の日本画には目上の何か邪魔な存在だった事でしょう。

時代が村松をそうさせたのか、又、それは村松が日本画の牙城、京都風とも関東風とも異なる静岡という温暖でののびやかな土地に生を受けた結果なのか一言では断じることが出来ませんが、いずれにしても、先人や他人にとらわれない自在な根性をを持っている自由の人と見てとれます。

なお、昭和36年頃と云えば、安保騒動が激しい頃でした「六月June」の画面中央に倒れている人が闘争で圧死した樺美智子さんであるとすれば氏はやはり画中にその時代の正義の所在を指し示しておかずにはおれなかったのでしょうか。

当時、東京芸大は比較的に穏やかな日本共産党の民青（民王青年同盟）が支配的であったためか、日本大学芸術学部の様な悲惨な騒動は無かったのですが、それでも日夜国

会周辺に集まるという現代では想像するよすがもないほど大学周辺は熱気と興奮につつまれていたと云えます。

感性豊かな芸術家達は勢いこの波と波長はいやがおうでも会ってしまいますという資質があります。村松も例外ではなく動いて活動が出来ないまでも、一人、アトリエに閉じこもり、苦渋



寄るA Approaching A  
90.9×116.7cm 1963/昭和38年



寄るB Approaching B  
116.7×90.9cm 1963/昭和38年

の中、冷静に画面と面壁していたとしても心中は乱れ、あれくるっていたのでしょうか。おのずと心の中が鏡の様に写し出されその心の高ぶりが、画面に定着して今日まで初期の動きが引きつづいてきたのではないのでしょうか。

昭和10年生まれの子松は安保闘争の原因でもある第二次世界大戦の負荷も色濃くせおいながら、人間とは何者か、どこから来てどこに行くのかを東京芸術大学で裸婦を描くかわら考え続けていたのではないのでしょうか。彼は裸婦を単なる絵を描く教材として一般の画学生の様な接し方はしなかったとも言えますし又、人間を描くことにより自分自身の所在を確かめ続けているのだと思えます。

子松は人間といういたらない生物の本質はいったいどこにあるのか、私とは何者なのか生と死とは一言で談ずればいたい何と言えば良いのだろうかを探し求め続ける苦難の求道者とも言えましょう。

が、しかし彼の絵から受けるもう一つの印象は、必ずしも苦渋にまみれてばかりではない。

いたって楽しい、気のゆるせる、天職を得た者だけが知る気楽で自由な性格の人だともいえましょう。

学生の頃から裸婦を描き続け、女性を愛し、美酒と酔いの中で画中に埋没し、自由自在に中心を吐露し、生まれたままの姿で画面にのめり込んでゆく。正に画人冥利につきる生き様といえるのではないのでしょうか。

子松芸術の初期から今日まで終始一貫してみられる生理的な曲線とその乱舞は正に我々人類が、いや他のあらゆる生物が願い続けてきた生命の連鎖。愛の大儀と男女の切っても切れない絆をロマンテストの彼は期せずしてこのことをいいあてているのでしょうか。そして画集のページをめくるたびに、彼、子松が画中にひそんでいて見る人々の心の中を秘かにじっと見つめている様に思えるほどなのです。